

小説集

——日本文学における美と情念の流れ

地獄

編・解説 笠原伸夫

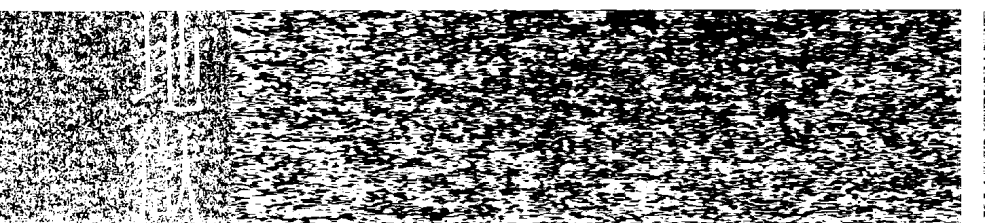
現代思潮社



編集協力 大友保典夫 笠原伸夫 編 現代思潮社

昭和三十三年四月

現代思潮社



叢刊

フシロ
日本文学における美と情念の流れ

編集

大久保典夫

笠原伸夫

久保田芳太郎

澁澤龍彦

濱田泰三

森本和夫

校注・解題 田中伸

山田清市

解説
笠原伸夫

現代魁蘭社

地獄日本文学における美と情念の流れ

1973年2月28日 第1刷発行

1974年11月30日 第2刷発行

発行者／石井恭二

発行所／株式会社現代思潮社 東京都文京区小日向 1-24-8

電話／代表 (943) 4406 振替／東京 72442 番 郵便番号 112

本文印刷／第一印刷株式会社

装本印刷／広橋精版印刷株式会社

製 本／今泉誠文社

(落・乱丁のものは本社またはお買求めの書店でおとりかえいたします)

0393-80003-1909

目次

黒蜥蜴／広津柳浪……………	3
海異記／泉鏡花……………	22
小さな王国／谷崎潤一郎……………	44
人を殺す犬／小林多喜二……………	68
裸虫抄／牧野信一……………	71
獄中日記／磯部浅一……………	84
牛人／中島敦……………	100
マリヤ達／三好十郎……………	105
心願の国／原民喜……………	112
夜長姫と耳男／坂口安吾……………	119
真夏の死／三島由紀夫……………	149

愛欲を生じ、吉祥天女の像に恋ひ、感応して奇表を示す縁 <small>(日本靈異記)</small> ……………	185
女人、悪鬼に点れて食噉はるゝ縁 <small>()</small> ……………	186
災と善との表相先づ現はれて、後に其の災と善との答を破る縁 <small>()</small> ……………	188
往生要集——序・地獄／源信……………	194
足摺 <small>(平家物語)</small> ……………	223
首渡 <small>()</small> ……………	227
歎異抄／親鸞法語録……………	233
砧 <small>(謡曲)</small> ……………	243
可笑記／如儡子……………	256
好色一代女／井原西鶴……………	261
心中天の網島／近松門左衛門……………	276
胆大小心録／上田秋成……………	298
解説 地獄、あるいは極限の生 <small> </small> 笠原伸夫……………	307

日本文学における美と情念の流れ
地獄

一

年齢廿五六の男、風体は職人。既や暮れんとせる夏の日の、暑熱尚お堪え難くてや、記章袷天の胸を開きて、浅黄の色褪せし手拭に汗を拭きつつ、腿より脛には蔽うものもなくて、表も鼻緒も砂塵に古びたる麻裏を、突掛草履の歩いそがしげなり。

身材は短き方にて、肉肥満たり。憎気なき丸顔の色白く、鼻は高からねど形恰好く、細く長き眼は常に笑めるが如く、口は屹と結びたれど、むつかしげならず、耳を蔽うばかりに伸びし頭髮は、垢づき乱れたり。

日本橋区浜町三丁目を傍目もふらず、頭は重ねなれど歩はせわしげなり。ふと面を上げて我ながら呆れし風情。

「何の事だ。おやおや。」と吐きつ歩を返し、右側なる薬種

屋の横手の露路へ入りたり。

露路を入れば、裏には三軒立の棟割長屋。取付には相用の井戸あり。井戸に沿いし長屋の一軒より、足音を聞付けしにや顔を出せしは、霜降頭の老婆なり。

「与太さん」と、老婆は通掛りし男を呼び掛け、「如何だつたい。産婆は居たかい。」と、眉根を顰めて返辞を伺う体。与太郎は上眼に老婆を見て、点頭く様に会釈し、「ああ、直きに行くつて。」

「そりゃ好い塩梅だ。早く来て呉れねえじゃ、何だか心細くつて。其もね、私に経験がありヤア訳やねえんだが、はらはらするばっかして、役に立ちや為ねえ。何ちにしたらつて早く来て貰いてえよ。それにお前、困ッちまうよ、れこにも。」と、拇指を出して眼を丸くし、「一方にヤアお都賀

さんが、今にも吐産しそうに陣痛るッて、うんうん呼鳴つてるのに、徳利と首引きか何かで、怒鳴りッ通しだらうじやないか。お都賀さんが可哀想だから、私もお前の帰宅る迄ともつて、今し方迄介抱てたんだけれどね、終にや私に喰つて掛るんだよ。お都賀さんにや気の毒だが、仕様がねえから、いま引上げたところさ。お前早く帰宅つて遣んねえ、お都賀さんがお前を待つて泣いてるわな、可哀想に。」

「すまねえ、すまねえ。叔母さん勘忍して呉んねえ。」と、与太郎は気の毒そうに打詫びつつ嘆息す。訴え顔せし老婆も今は慰め顔。「なにお前、お前にや実に気の毒さ。性来だから為様がねえが、お前の爺さんだけれど、彼様人は無えよ。お前は親孝行だし、お都賀さんは順しくするんだし、何にも不足があるめえに、如何して彼様だらうかねえ。」

「どうも為様がねえ。叔母さん、お前にや実に済まねえ。」

「あれ、また怒鳴つてるよ。早く帰宅つてお遣りよ。」

「実に為様がねえなア。」

与太郎は老婆に辞れ、空屋を一軒隔てし長屋の奥隣、我家の門口を入るより早く、小言は脳天へ落掛りぬ。

「やい、与太、与太ソ兵衛、何処を魔誤ついてやがるんでえ。噴の事だと云やア、鼻汁ッ垂しめッ、二つ返辞で躑躅しやアがッて、親にや構やアがらねえんだな。お都賀と共謀になつて、親に当りやアがるんだな。当るなら当つて見ろい、へん年は老つたッて鐘馗の吉五郎だ。さア何とでも為て見やアがれ。」

与太郎の父吉五郎と云えるは、年六十に近けれども、骨太く肉脂つきたり。太く高き鼻の先垂れて鷲の嘴の如く、大なる眼は白眼がちてぎ、よろ付き、脣厚くして且つ反りたり。赭く禿げて光りたる頭上には、十筋ばかりの白髪を集めて鬚を落し、刷毛先を散らしたるは、鍔銀杏の昔を尙お今に忍べるにや。明衣は脱ぎて投出し、年には羞しかるべき鐘馗の文身を、素裸になりて胡坐をかきたり。前には鮪の刺身を竹の皮のまま、臍をも出さで畳に置き、右手には五合徳利、左手には、盃に湯吞をさえ面倒なりとや、飯茶碗をとりたり。

家は土間、炊場をも合せて六畳の間。壁と壁との一隅、左なきだに小暗きを半屏風に囲いつ、他の一隅には、大工を家業の道具箱を押寄せあり。押入の奥は見えねど、一棹

の簞笥だになく、長火鉢と竈との二つが、僅かに家の飾りとぞ見ゆる。

中央に胡坐をかきたる吉五郎、既や青くなるまでに酔い、口はへの字結び、瞳子は上眼に瞶り、まだ土間に立ちたる与太郎を屹と睨みて、

「さア如何でも為やアがれ。年は老ったって鐘爐の吉五郎でい。箆棒めつ、与太、手前なんぞにや指一本ささせねぞ。さア何とでも為やアがれ。」

与太郎は上にあがりて、「家爺お前如何為たてえんだよ。おいらは何とも云ってやア為ねえよ。お前を如何しろてつたつて、串戯じゃアねえ、如何なるもんかね。腹ア立つ事があつたら、おいら謝罪のからねえ、家爺、勘忍して呉んねえな。」と、父を和めて、屏風の傍に立寄りんとするを、「与太待てつ。」と、呼止むる吉五郎。「何だよ、家爺。」と、振返る和太郎をはたと睨み、「何だよとア何でえ。此処へ来い。ええ、何故来やがらねえんだ。」

父の命に詮方なければ、与太郎は産に難める女房の上氣遣わしく、立ちながら屏風の内をさし覗けば、枕にしがみ付きて、苦痛を耐え忍べるお都賀、顔も得あげで、乱れた

る頭髮の打頓えり。

「愚頭愚頭しねえで、来いと云つたら来ねえか。」と、嘔吐くが如く罵る吉五郎。

「お前さん、は、は、早く、お出でよ。」と、云う声の断続に苦痛も察われ、虫の音なる女房が言葉に、与太郎は尚お一步進み寄りて、「今直きに産婆が来るからな、耐忍して居ねえよ。」

「あ！心配してお呉れでない。もう、なアに、苦しかア……何ともありやしないよ。私ん所ア能いから、は、は、早く、お出でよ、お家父さんが呼んでお居でだから。」

「耐忍しねえ。もう直きに来るんだから。」と、女房を慰め置きつ、与太郎は腕打組みて、吉五郎が前へ坐りたり。

「おい与太。手前何だ、乃公と話す間もねえんだな。」と、茶碗に八分目の酒を一息に飲み乾し、長き息をふうつと吐く。

与太郎は眼を閉じて垂頭き、「其様事アありやしねえよ。今帰宅つた所なんで、鳥渡いま……。」

「今帰宅つたなア、手前から聞かねえでも知つてらア。手前何の用があつて、何処へ行きやアがったんでい。」

「何処へって、産婆を呼びに。お都賀が陣痛つて、今にも飛出しそうなんで。見ねえな……。」と、吉五郎が顔を屹と見て、其目に産婦を見返り、「如何に苦なかりやがるから、産婆を呼びに行つて、今帰宅つて、鳥渡お都賀の……。」

「だから云わねえ事か。一人前の腕も持たねえで、孩児を生えて、手前其で如何する積りなんでい。」

「如何するッたつて、お前、今更其様……為様がねえよ。」

「為様がねえものを、何故こせえやがッたんでい。」

「だつて……。困ッちまわア。」

「何だと、困ッちまうだア。」と、乗出すが如く顔を進めて眼を怒らし、「生意氣なことを抜かしやアがるな。篋棒めッ、手前の様な意気地なしにや、鼻は有てねえッて、最初ッから云つてるんだ。鼻を有ちやア児が出来てるてえなア、手前の様な没分曉漢にだつて、分らねえ事はあるめえ。今でせえ、篋棒めッ、たッた一人の親の口を乾しやがるじゃねえか。」

「家爺、静かに云つて呉んねえな。」と、与太郎は家外を見返り、「外聞が悪いやね、親の口を乾すだなんて。」父を見る眼も自ずと力む。

吉五郎は空になりし徳利を板の間に投出し、「其面何でい。其様面ア為やがつて、如何為ようと云うんでい。やいと太ッ、手前外聞が悪いてえ事知つてる気か。よう、与太ッ。」

与太郎は相手にならざるこそ能けれ、とは思えども立ちもならず、今は倒に尻を据えつ、腰の煙草袋を取り出し、伏目になりて煙草を吸む、其眉頭には皺みも見ゆ。

吉五郎は徳利を取上げ、これ見よがしに振揺かしつ。

「六十近い老親の口に、好い酒一杯宛行えねえで篋棒めッ、外聞が悪いア、何吐しやがんでい。年老つて楽が為たけりやこそ、手前の様な無気力野郎を、馴れねえ男の手一つで人間並に為て遣つたんだ。職業も碌素法出来ねえ木葉大工の癖しやがつて、直きに鼻の詮索よ。親へ柔な思いもさせやがらねえで、鼻の御託も凄じいや。初めッから云わねえ事ちゃねえんだぞ。お都賀が来やがつてから、口が殖えたの何のッて漸々乃公の口を絞りやアがつて、此頃じゃアごんつと相場を定めッちまやアがつたじゃねえか。此上孩児なんぞ出産されて、おたまり小法師があるもんかい。孩児が生れりやア、乃公はどんな目に会わされるかも知れやし

ねえ。へん、老人の乾物なんぞア、何処へ持ってッたッて、
銭にやなるめえぞ。加之に無塩の脂氣なしと来ちゃ、与
太、手前控所にも魔誤つくだらうぜ。」と云い止んで、空徳
利を傾けて茶碗へつがんとし、「へん、何の事アねえ、の
の字を書いたッて初まらねえ奴よ。」と、又もや徳利を投出
しぬ。

「無えんだねえ。なけりや今買つて来るよ。濟まねえけれ
ど、産婆が来る迄だ、鳥渡待つて呉んねえよ。お前の云う
通り、お都賀を娶つたなア、自分が悪かったから勸忍して
呉んねえ。今更追出されるもんでもねえし、其に孩児が出
来ちゃア、もう詮方がねえよ。お前が年老で、四肢は漸々
きかなくなるし、其世話をさせてえと思つたから、お都賀
を娶んだ様なものの、如何した訳だか、お前の氣にや入ら
ねえし、自分ア実の後悔してるんだ。だがね家爺、お前だ
ッて孫だ。自分だッて自分の孩児の面初めて見るんだから、
今日は先ず自出度えんだ。子よりも孫は可愛いとさえ云う
位だから、お前も耐忍して機嫌を直して呉んねえよ。今日
一日——孩児が出生しやアがるまで、後生だから機嫌を直
して溫和く飲酒で居て呉んねえ。産婆が来せいすりや、自

分が大坂屋へ行って、お前の飲みでえだけ、一升だッて二
升だッて買つて来ようよ。後生だ、孩児が出生すまで、家
爺、耐忍して居て呉んねえ。」

「篋棒めッ、世間の奴等ア知らねえが、おらア孫の面なん
ぞア見たくもねえんだ。お都賀の腹から出やがるんじや、
どうせ人間並の面アして居めえよ。手前産婆なんぞ呼ば
ねえで、香具師でも呼んで来やアがりや能いんだ。其方が
余程儲けづくだぜ。」

屏風の内には忍びかねてや、吁鳴る声のいと苦しげなり。
与太郎は屏風の方を見返り、また父の方へ対して、「ま
ア能いやね。どうせ碌な孩児や出来めえよ。種々事を聞い
ちやア血が上るめえと……。」と、静かに立ちて屏風に立
寄る。

吉五郎は見送りに冷笑い、「へん、噂となりや彼様阿魔
でも、憎くもねえそらだ。はははははは。酉の市の売残り
なら強勢だが、蟪蛄の隻目と来ちゃア、昔なら兩國だが、
今じやア奥山もんだ。生れた其子が蛇男、親の因果が子に
報う、やア評判じや評判じや。」と、空徳利もて板の間を打
ち敲く。

女房の手前氣の毒さは云うにも足らず、万一血の上る事
ありもせばと、与太郎は撈りたき程切なき胸を、斯かる父
を有ちし身の不勝と押鎮めても、流石に涙ぐみたる眼に、
屏風の中をさし覗けば、お都賀は枕に顔を押当て、岳父の
悪口に裂けなはず胸の苦しさに、時を限って催し来る陣痛
を、声立てまじと身を悶えて忍べる体。与太郎は見るに眼
を閉じ、枕頭に坐りし膝は戦きたり。

お都賀の肩に手を掛けたる与太郎、「お都賀。」「え。」と、
お都賀は顔も得あげで、僅かに漏らす返事だに、忍音にし
て涙をもちたり。

「辛棒して呉んねえ、よう。今なア、産婆も今来るから、
霎時の間の辛棒だ。耐忍してなア、自分が知ってらア、手
前が心配することアねえんだ。能いか。恨むない。恨んで
呉れるな、よう。お願いだ。」と、耳に口を寄せつつ云えば、
「あー、なアに、私や恨む——人を恨む事はねえよ、自分
を恨むばかりなんだよ。だがね与太さん、私や実因果な
んだね。考えると……。」と云いかけて、執手に夫の手を確
と握り、身を顛わしつつ泣く。

二

お都賀は俗に厄年と云う十九。細面にして下品ならぬ面
貌も、名から松皮と称ばるる黒痘痕、眼さえ左には星入り
たり、鼻も口も尋常ながら、眉毛は赤土の土手に、枯木の
扶疎なるも斯くや。髪はいぼじり巻の鬘も、火の点く
ばかり脂なく乱れぬ。苦痛に神勞れ気衰え、結びし髻頭打
顔い、夫を見上げし眼は、白眼に血さえ走りたり。

面は人の花、眼はまた面の花なるべし。色の白きにも七
難は包すと云うに、面の色は黒きが上に精味を帯ち、薄痘
さえ可厭なるを、目に釘する松皮痘痕、吉五郎が口癖とし
て、隻目の蟾蜍と罵れるも、憎きが上の悪口のみにはあら
ざりけり。

なべての上に美しきを愛づるは、自然なる人情、況して
百年僧老の妻を選まんに、美人癡漢と眠れるが多き世に、
如何なれば一つならず二つまで、花の色香なきをば摘りた
りし、与太郎が意中こそ不審しけれ。

与太郎と吉五郎とは、血を分ちし親子にはあらざりけり。
吉五郎が女房われに子なきを悲しみ、世話する者あるに任

せ、親知らずの約束して、腹も痛めず我子となせしは、与太郎が二歳の秋の暮なりきと云う。

離人形はおろか、狎猫さえ生けし子の心になりて愛ずること、石女には多き例なれば、況して神かけ欲しかりし児の、われを親とし馴染むに、他家の親には笑わるるまで、限りものう鐘愛がりし与太郎が養母は、今より十年以前、春三月雪降りし年の、其月の上旬より余寒に中てられ、幸なく余病さえ起りて、半月とは臥しもせで、散るを桜花の盛りなる頃脆くも世を捨てたりき。斯かりしより後、与太郎は吉五郎が手に成人りて、聽てぞ小腕ながら父には勝り、朝夕に追われざる迄にはなりけるなり。似た者夫婦のみにはあらざりけり。吉五郎は其妻に異りて、与太郎を子とし愛せるならねば、女房世を去りし後は、職業思わしからずとて、我のみ酒臭き息を吐きても、与太郎へは朝夕を欠かしめし事も多かりき。斯くしつつも尚お与太郎を養い、螟蛉なる由をも知らしめざりしは、思いの外小腕の利きて、あわれ一人前の大工となりなん見込あれば、これに依りて老後を安くせんと思いたればなりけり。養母が与太郎の螟蛉なる由を、彼のみにはあらず、世間へも深く包みし上、

度々住居を転えたれば、与太郎は其を知らん機会なかりき。父の辛きにつけては、飢に眠られざる夜半の枕に、亡母愛懐の涙は注げど、さて父を恨まん心はなく、命とし好きな酒なるを、何程飲まれたればとて、何程の事かあるべき稼ぐに追付く貧乏なしとさえ云うものを、老後を楽しくさせてこそ、養育の恩の万分之一をも報ずるなれと、毎日の賃金は我手へ留めずして、悉く父に呈し、尚お酒料の不足のことを憂え、おのれは粗衣粗食を分とし、花街は云うも愚、つい鼻の前なる郡代の矢場さえ覗きしことなかりき。されば、仲間の若者等には、交際を知らざる唐偏朴、さては愚頭与太と綽号せられて、列外にされたれども、我は我なり、人並に外るればとて何かあるべきと、其を口惜しと思う気色だにあらざりき。

されども、節を知らず飽くことを知らず、量なき酒料ばかりかは、吉五郎が贅沢三昧に、与太郎一箇の腕に油を絞ればとて、いかでか支うることを得べき。稼いでも稼いでも、朝夕の出入に不足を責められ、たまたま病氣或は職業なきたため家に在れば、其日の料にも追わるる不始末。酒なければ瞬時もあり難き、父が不機嫌を見るが可厭さに、四

苦八苦の算段も尽きがてなり。加之朝夕の炊事も其手にすなれば、四六時中心も骨も折れ果てんとし、怠るとにはあらねど、自然と職業に身の入らざる日さえあり。職業に身を入れねば、得意場の思惑悪く、うけ悪ければ賃錢も少く、結局は父の不機嫌を見るこそ辛けれ。世をも人をも無情く覚えて、今は根氣も尽果てたるを棟梁の某見かねて、其が内幕を聞きもし協議をも遂げたる末、是を救わんには、女房を娶つの外あるまじと勧めけるを、肉身分けし親子差向にてさえ、円滑は行き難き中へ、他人が入りてはと、与太郎最初の中は謝絶りたれども、女房は家治を治むる道具、此なくては如何でか家治まるべき、家治まらずば、いかでか世に立つことを得べき、殊に父御の介抱を委み置かば、後やすく心も長閑に、職業にも充分身を入れらるべし。さすれば、自然と生活も楽になりて、父御への孝養も出来る道理にはあらずやと、真心ある勧めに承伏し、似合しき縁もあらばと頼み置き、喜ばせんものをと、父へ其由を告げけるに、吉五郎は心中面白からず、嫁とは云えど心置かれ従来(よなま)の我儘はなるまじ、云わば敵を二人にするも同じりと、今でさえ酒料の不足勝なるに、人一箇殖えるだけ影響

を食うて溜るものかと、兎角に難じて応と云わねば、与太郎は板挟みになりて困じ果て、父不承知なるを如何にせん押して娶らば却つて風波の起る種ぞと、棟梁には謝絶りけるに、其様没分曉漢の親があるものぞ、乃公に任せよと、吉五郎に会いて理害を論しけるに、道理には横紙も破れず、波面つくりながらも承伏しければ、相談は早く嫁を迎うるばかりに進みたりき。

斯くて、棟梁が媒酌に迎えしは、何処へ出しても羞しからぬ容女、色白にて眼に権をもち、口尻あがり小股しまりて、半天を引掛け吾妻下駄を突掛けし姿は、与太には惜しきと仲間(なな)に評判され、羨まるる迄夫婦間は睦まじかりしに、何とかしけん廿三日目に逃帰りて、彼方より無理離縁を乞りぬ。次に迎えしは、むっちりした丸顔、眼の下に黒子ありて愛嬌ほたばたと落ちなん風情、年も十七咲出でし花に比べたりしに、或夜泣明せし次の日、吉五郎が洗湯へ行きし留守の間に見えずなりぬ。六人目迄は三十日とは辛棒せず、何れも逃帰りたれば、後には、何か有るまじき評判さえ立ちて、媒酌せんと云う者さえあらずなりき。七人目に来りしは、今の女房お都賀なりける。

与太郎は六人の女房に懲り果て、此上は一生独身にて暮すの外なし、父を見送りし上ならば、また御相談をも願ひましようが、先ず其までとは、たまたま世話せんと云う者あるをも謝絶りたりき。さるに、不思議なるは父の吉五郎前に嫁を迎うるは不承知なりしに似ず、頼りに与太郎を促し、一日も早く七人目を迎えよと云う。万事に父の命を背かざる与太郎なれども、懲りる仔細ありて懲りたりし今日、容易くは承引かざりしに、余りに迫らるる事の切なるより、又同じ事を繰返すも厭なれど、詮方なきまま無益と思ひながらも、七人目を迎ふることとはなしけり。

生来の不具ならねば、容姿には望みなし、氣立素直にして実意深く、難物の岳父の機嫌を損ねざらん女をとの希望親ある身には道理ある希望なれども、何か隠れなき評判となりたれば、与太さん一人の処ならば、望んでも遣りたきものなれども、あの岳父殿がと、後を見するもののみなりしに、去る人の世話にてお都賀と見合せし時は、いかに容姿に望みなしとは云いなながら、与太郎は此はと二の足を踏みたりしが、女らしき女には既や懲り果てたり、此女ならば去る事もあるまじ、花ありても実なくば何かせん、外

見は瓦礫なりとも、内に金玉を包みたらんこそ、家に取りの実なるべけれど、即座にお都賀を娶るべしと約したりき。斯くと聞きたる吉五郎、喜ぶかと思えば不承知を唱えて、一つには家の飾りともなるべき女房、酔興にも程こそあれと難ずるを、一旦約せしを犬猫同様、掌かえす違約もなるまじ、兎角に私が望みなればとて、終にお都賀を娶りたりき。前々の六人の嫁には異りて、お都賀が興入の其夜より、吉五郎莞爾ともせざれば、岳父は辛き者とは聞きたれども、此ほど迄とは思ひ掛けざりき。とは云え、両親には幼時死別れ、頼みにすべき兄弟もなければ、親戚とても構つて呉れざる、生来ならねど不具に等しく、色も香もなき此身を、縁ものとは云いながら、女房に為つて呉れたる夫の志こそ忝なけれ、岳父の何程も辛くば辛かれ、見事に辛棒為遂げて、鬼を仏に為しなんこと、我心の持ち様一つなるべしと、お都賀は健気にも思い定めつ、留守勝なる夫、家にのみ在る岳父の何れへも、陰陽なく真心もて仕えけるにぞ、今度こそはと、与太郎が頼母しく思えるには引更え、吉五郎は朝から酒びたしの我儘三昧、下女同様に追使えど、はいはいと柳のしなには、野分もすさぶに

張合なく、兎角して一月余りは過ぎたりき。

或日の夕暮なりき。与太郎は例の職業に出でて留守なりしが、何事の発れるにや、お都賀は俄然泣声立てつ、家外へ逃出しぬ。一軒隔きて隣家の老婆、其声を聞付けて馳来り、何事ぞと問えども、お都賀は仔細を云わで唯泣くのみ。家内をさし覗けば、吉五郎眼を怒らして突立ちたるが、家外まで追出でんとするにもあらず、老婆が来りしを見て、何とやらん手持無沙汰の気色見ゆ。

老婆は解けかかりしお都賀が帯を引締め遣りつ、「泣いてちやア見ッともねえよ。まア如何したてえんだね。お都賀さん、私に理由を話しなざるが能い。吉さん、お前さんも、様子は知らねえけれど、まア勸忍して遣つて呉んなせよ。与太さんは留守し、まア静かに。……お都賀さん、如何したてえんだよ。」と、双方を押し和め、様子を聞亂さんとすれども、お都賀は尚お泣入りて言葉はなし。

「お媼さん、放棄ッとして呉んねえ。太い阿魔だ。其様面アしてやアがって、生意気を吐すない。与太が帰宅つたら、何だとか吐しやアがったな。うす野呂の与太兵衛を誤魔化しやアがって、能い加減な作言を吐きやアがると承知しね

えぞ。何だッ、其面ア。隻目の蟾蜍よろしくてえ面ア為やアがって生意気な事吐すない。作言つきやアがると、生かしちや置かねえから、そう思つてやアがれ。お媼さん、放棄ッとして呉んねえ。此様強情な……太い阿魔ッちゃねえ。与太に何とでも云つて見ろい。作言をつくら吐いて見ろい。」

いざと云わば、打ちも掛りなん吉五郎が見脈に、老婆は仔細は知らねど、また例の一件ではあるまいか、まさか今度のに其様事はと、尚お疑いを存しつとお都賀を問詰むれど、泣入りて仔細を語らず、僅かに口を開きて、「何様面ア為て居たつて、心まで……。」と、云掛くれば、吉五郎が嘔付く如き怒声に、云わんとしては云いかぬる風情なり。老婆は愈よ其と覚れど、知らず顔に吉五郎を和めつ、お都賀を慰めつ、兎角しける処へ、与太郎帰宅りたりき。

老婆は与太郎に対し、おのれが見し様子を語りて、仔細は知らねど、お都賀どの悪きものなれば、悪き様に詫の為様はお前の心に在るべし、黙いに他人が入つたなら、そこには蓋も入る道理、親子夫婦三人水入らずの和合をと、好機会にして帰り去りぬ。